



おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（桓文社）
「郷土とことわざ」（人間の科学新社・共著）等

「シミルとショッキンボウ」

厳寒時、たまたま屋外に出しておいた洗濯物がパリパリに凍った状態を、新潟では「洗濯物がシミタ」と表現します。近年の暖冬傾向とはいえ、新潟の冬の寒さにふさわしいことばです。

このシミルは漢字で表すと「凍みる」ですが、共通語の凍みる「凍みいる寒さ」のような感覚的な表現と異なり、新潟版「シミル」は、水分を含んだものがそのまま凍る状態を表しています。たとえば、こちらも新潟の冬の風物詩「大根干し」（一本ものや切り干）を「干し過ぎたら、あきヤシミタ」というようにも使います。そういえば、「凍み豆腐」という表現もありました。

「凍み豆腐」は共通語ではないのかな？という声もあるかと思いますが、「凍り豆腐」（一般的には高野豆腐の名）が全国区(?)の名称で、主に新潟以北から東北にかけては「凍み豆腐」と称しているようです。

実は雪国新潟では昔から「シミル」（凍みる）と「コオル」（凍る）をきちんと分けて使ってきました。

大根や豆腐、洗濯物等水気を含んだものがそのまま凍ることを「シミル」、池や小川、あるいは屋外に置いたバケツの水そのものが凍った場合は「コオル」というようにです。凍った雪道を滑って遊ぶ昔のこどもの遊び「シミ渡り」も、水気のある雪が凍ったのでこう称されてきたのでしょう。

興味深いことに「洗濯物がシミル（凍みる）」と表現する地域は、北から東北、新潟、北陸、そして南下して中国、九州の日本海側に点在します。一方、関東を中心に太平洋側は「洗濯物がコオル（凍る）」と表現します。

また、京都を中心に「洗濯物がイテル（凍てる）」という表現がかつてみられました。これは、冬の寒さを凍（し）みる、凍（こお）る、凍（い）てる・凍（い）てつく、と体感表現にも地域の特徴があり、先人の豊かな語彙力と地域色の豊かさが偲ばれるというものです。そうそう、東北には、シバレルというこれまた厳しい寒さを表現することばもありました。

さて、新潟ではシミタ状態を「ショッキンボウになってシミタ」と表現するこれまた雪国にふさわしいことばがあります。これは衣服や何かの物体が文字通り(?) シャキッ!パリッ!状態のさま。とくに獲れたての活きの良い魚（おもに鱈やブリ等の冬の味覚）を「ショッキンボウの魚」と表現する新潟ならではの浜ことばです。

ショッキンボウのボウはおそらく「棒」かと思いますが、ショッキンボウの冬の魚が魚屋さんや市場の店先に居並ぶさまは、まさしく「ショッキっとした棒状態」で、昔の人は実にうまい表現をしたものだと思います。ほかに、鮮度の良いさまをまるで生きた魚にたとえて、擬人化した「ショッキン坊」という説もあるとかないか?いずれにしても、シミルもショッキンボウも、ふるさとの風土が生んだことばです。

